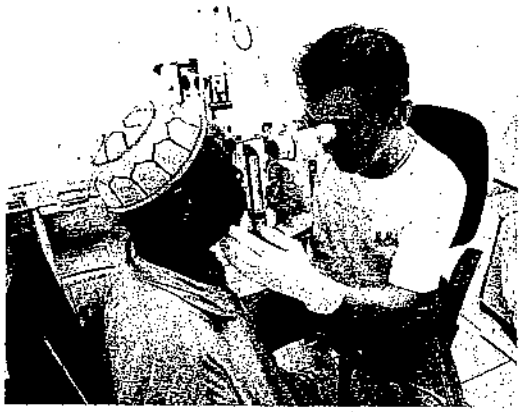
2010.9.22(水)

徳島新聞

白内障患者113人手術

モザンビーク

徳大病院・内藤准教授ら



白内障患者を診察する内藤准教授㊨＝モザンビークのベンバ市立病院（内藤准教授提供）

徳島大学病院眼科の内藤毅准教授(55)＝徳島市南佐古三番町＝と非政府組織（NGO）「アフリカ眼科医療を支援する会」の医師や看護師ら7人が、眼科医療支援のためアフリカ南東部のモザンビークを訪れ、白内障患者113人に手術を行った。現地での医療支援は今年で3回目。

内藤准教授らは3日に日本を出発し、タンザニア国境近くのベンバ市立病院を訪れた。5日、現地の眼科医や眼科助手らとともに白内障患者約130人を診察。6～8日は先天性白内障の小児患者を含む113人に、目の中に人工眼内レンズを入れる手術をした。

手術後、患者らは「1人で歩けるようになった」「周りの風景や家族の顔がよく分かる」などと喜んだという。症状が悪化し、人工眼内レンズが入れられなかった12人には日本の企業から寄付を受けた新品の眼鏡を贈った。

日本大使館を訪れるなどした後、12日に帰国した内藤准教授は「モザンビークに白内障患者は約20万人いるとみられている。現地の医師だけで手術ができるよう、引き続き技術指導に力を入れたい」と話している。

内藤准教授らはモザンビークで、2008年は47人、09年は58人に白内障の手術を行った。